

だけでなく人種的隔絶を自発的に選んでいる。統合された社会というアメリカの夢は、汚れた空気の中に雲散霧消してしまった。

この記事はアメリカ社会の暗い面を強調し過ぎたきらいがある。いろいろな意見はあるだろうが、悲しいことに、私自身もベシミスチックになっている。イギリス人

の目からも閉塞状態のアメリカ社会の姿が浮かび上がってくるのである。

米国民は大統領選挙でベビーブーマーのクリントンを選択した。あの開けっ広げのアメリカは戻ってくるのだろうか？

(佐々木 謙一記)

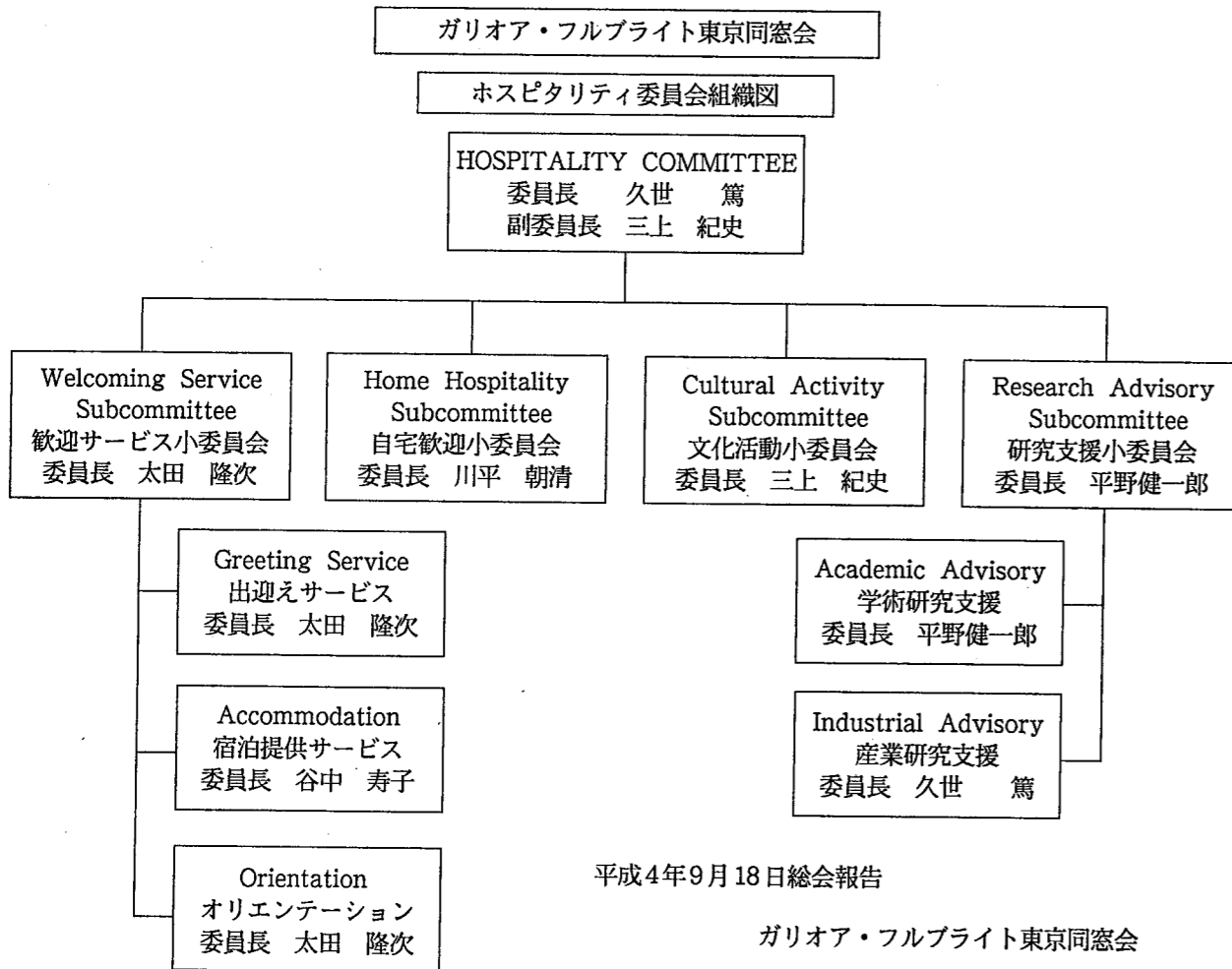


フルブライト計画40周年記念大会開く 天皇・皇后両陛下をお迎えして盛大に

ことはフルブライト計画が始まって40周年に当たります。9月18日天皇・皇后両陛下をお迎えして横浜のパンフィヨ横浜で記念全国大会が開かれました。日米の同窓生と現役のグランティおよび友人らが一堂に会する一大イベントとなりました。日米教育委員会、日本ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会、日米教育振興財団（フルブライト記念財団）の共催になるもので、テーマは「日米関係を見つめて」。全国から1000人に近い参加者があり、和気あいあいのうちに旧交を温める人、パネルディスカッションに熱心に耳を傾ける人と大変な熱気のうちに無事終了しました。

大会では来賓の挨拶のあと、行天豊雄（1956年）東京銀行会長が基調演説を行ったあと、ランチョン・レセプションがあり、天皇陛下のお言葉をいただきました。さらにブッシュ米大統領の祝辞がアマコスト駐日アメリカ大使から披露され、次いでテープに録音されたフルブライト氏のメッセージが会場に流されました。続いて第一回「フルブライト賞」の授賞式が行われました。（受賞者の名前と経歴などは別項）

午後はパネル・ディスカッションに移り、政治・経済・メディア、比較文学・大衆文化、教育・科学の3分野に分かれて活発な意見交換が行われ、有意義な一日を過ごしました。



平成4年9月18日総会報告

ガリオア・フルブライト東京同窓会

会長 渡邊 宏

編集後記 ニュースレター第6号をお届けします。例年ですと6月ころに出すのですが、今年はフルブライト計画40周年記念大会が9月に開かれ、東京同窓会もそれに合わせたので遅れました。私事ですが、私は1958年に永川丸でシアトルに渡ったフルブライターです。港に停泊して一夜明けて船からシアトルの町を初めて見渡した時のことは一生忘れません。後ろの丘陵の中腹を走るハイウエーを自動車がびゅんびゅん飛ばしているではありませんか。車ってこんなに早く走るものかとびっくりしたのです。一種のカルチャーショックです。当時日本では新聞の交通事故の記事に、時速20キロの猛スピードで、などと書かれていた時代でした。（佐々木）

ガリオア・フルブライト東京同窓会事務局 〒102 東京都千代田区三番町6 スミスクライン・ビーチャム社内
電話 (03) 3221-1841



天皇・皇后両陛下を囲んで乾杯。左端はアマコスト駐日アメリカ大使（ジャパン・タイムズ提供）

◎会長に渡邊宏氏を選出

＝東京同窓会1992年度総会開く＝

同窓会の総会は例年春に開かれますが、今年はフルブライト40周年記念大会が9月に開かれることもあり、遅くなりましたがそれに合わせて9月18日、横浜市のパンフィヨ横浜で、40周年記念行事終了後開かれました。

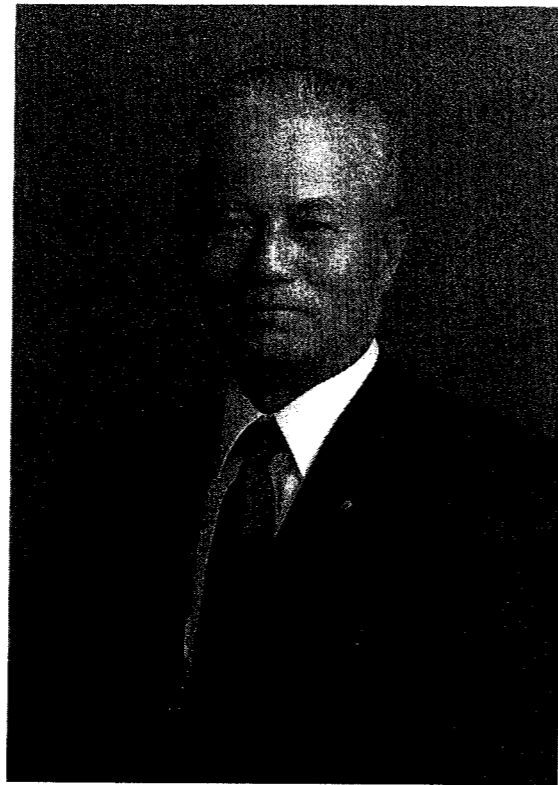
1991年度事業報告と決算報告、92年度の事業計画と予算案が提案通り了承されました。また今年には役員交代の時期に当たり、92～93年度の役員人事（別項通り）が承認されました。総会では川村茂邦前会長から、同窓会のみならずの発展を願うとの挨拶があったあと、渡邊新会長より川村前会長に対して感謝の言葉が述べられました。渡邊新会長はこれまで副会長として活躍、特に長期にわたって募金運動に貢献されました。

また1986年4月に日米教育交流振興財団が設立されて以来、6年半にわたって事務局長として縁の下の力持ちの役を快く引き受けて下さった池田政利さんが引退されることになり、会場から盛大な拍手で池田さんの労がねぎらわれました。新事務局長には10月1日付けで加藤弓弦（ゆづる）さんが就任されました。

新会長のメッセージ

個人募金にぜひご協力を

渡 邊 宏



川村前会長他皆さんの御推薦により第5代の会長に就任させて頂く事になりました。同窓会発足直後強力なプロモーターであった小山八郎さんからの御依頼で募金活動のお手伝いをする事になってから約10年、主として募金、又途中で河村会長の下で事務局のお世話をすることになり、今日に至っています。

川村会長、橋本実行委員長始め、実行委員の皆さん池田事務局長、日米教育委員会の皆さんの一方ならぬ御努力で40周年記念事業も盛会裡に終了致しました。関係者の皆さんに心からお礼を申し上げたいと存じます。

同窓会活動は役員の方々を始め、会員諸兄姉の熱心な御支援によって成り立っています。第一番に会費の納入状況ですが東京同窓会の場合有資格者約3,000名に対し最近では1,800名、60%をこえる方々が御協力頂いています。当初1,000～1,200名だったのが3～4年前から、リマインダーを一回余計に発送するだけで50%増加しました。皆さん失念しておられるだけで、基本的には同窓会の趣旨に御賛同頂いているのだと思い感謝しております。

年次総会、年末のグランティール歓迎会等の恒例のレセプションの他、成田空港或は箱崎ターミナルでの歓迎諸活動、最高裁、国会の見学、地方旅行、能への招待等ホ

1992～93年度役員名簿

名誉会長 小山八郎
 会長 渡邊 宏
 副会長 田中 哲男（会長代理）、行天豊雄、平野龍一、小西輝明、松原亘子、高澤廣茂、安成子
 監査役 堀 憲明

担当副会長

Foundation Liaison

委員長 堀江 昭 小西 輝明

Alumi Meetings

委員長 上田 俊男 安 成子

副委員長 正野 敏夫

Hospitality

委員長 久世 篤 高澤 廣茂

副委員長 三上 紀史

Publicity

委員長 佐々木謙一 行天 豊雄

Administration

事務局長 加藤 弓弦 田中 哲男

スピタリティ委員会の活動等、委員や会員の皆さんの献身的ボランティア活動は目ざましいものがあります。

その他同窓会の事業で最も評価の高い活動に募金活動があります。御承知のように募金額は過去10年で篤志家の大口献金を含み11億円に達し、支援した留学生も米国人133名、日本人25名計158名に達しています。

私が会長を勤めます今後2年間につきましても、この様な良き伝統を継承し、次の世代につなぎたいと考えておりますのでよろしくごお願い申し上げます。

又今年は5年に1回の個人募金の年になりますので会員の皆様の御理解と積極的な御協力をお願い申し上げます。御存知のように同窓会の募金額の大部分を占めております企業その他団体の冠奨学金も、これを実質的に支えているのは今回で3回目になる会員の個人募金であります。冠奨学金を抛出して下さる企業団体の責任者とのお話の中で、募金の趣旨、目的は勿論重視されますが、

それにも増して同窓会の会員が身銭を切って募金に応じてくれているという事実が、企業の御賛同を得ることに如何に大きな貢献をしているのかは計り知れない事です。

そういう意味からも今回の第3回の個人募金は是非同窓会活動のバックボーンとして前2回同様成功裡にとり進めさせて頂く様心からお願い申し上げます。

われわれ自身の体験が示すような個人レベルでの国際相互理解の推進が国際関係の正常化に果す役割の大きさは極めて大きいものがあります。

同窓会は会員同士の親睦もその目的の一つですが、われわれの場合募金その他のボランティア活動を通じて、日米関係の正常化、更には国際関係の全般的正常化に草の根の貢献を果そうという高い理想があります。これからの2年間皆さんの御理解と御協力の下でこれ等の理想、目的が少しでも前進できます様願っております。

GF 東京同窓会：1991決算及び1992予算案

1991年度予算及び決算案			1992年度予算案	
摘 要	予 算	決 算	摘 要	予 算
☆収入の部	12,028	13,849	☆収入の部	15,530
前期繰越	6,828	6,828	前期繰越	9,160
会費収入*	5,000	6,792*	会費収入*	6,000*
利息収入	200	229	利息収入	370
★支出の部	4,996	4,689	★支出の部	5,024
(1) 事務管理費	2,576	2,855	(1) 事務管理費	2,840
(2) Alumni Meetings	398	39	(2) Alumni Meetings	348
(3) Hosp.: 歓迎会	793	225	(3) Hosp.: 歓迎会	228
(4) Publicity	236	369	(4) Publicity	250
(5) Hosp.: 専門部会	693	1,201	(5) Hosp.: 専門部会	1,058
(6) 予備費	300	0	(6) 予備費	300
★収支差額〈千円〉	7,032	9,160	☆収支差額〈千円〉	10,506【1992年度未残高】
◎金融機関・預金残高	1990年度末	1991年度末	(注) *フルブライト記念財団より募金手数料老百万円を受領(04/06/92付)	
富士銀行(定期)	3,000,000	3,000,000		
富士銀行(普通)	3,191,044	5,892,405		
郵便貯金(普通)	344,548	267,913		
郵便振替(加入)	124,120	0		
郵便担保金	168,000	0		
合 計〈円〉	6,827,712	9,160,308		

(注) *フルブライト記念財団より募金手数料老百万円を受領(03/18/92付)

◎第1回フルブライト賞を贈る
日本人3人、米国人2人が栄誉

フルブライト計画40周年を記念して設けられたフルブライト賞の第1回受賞者が決定され、40周年記念全国大会で授賞式が行われました。対象は「教育交流を通じて世界共通の感情を分かち合うため、類稀な、かつ貴重な認識を育てるという」フルブライト精神を、仕事または私生活を通じて発揮された個人。

広中和歌子(衆議院議員)、岩国哲人(出雲市長)、木田宏(教育者)、小島明(日本経済新聞)、永野健(日経

連会長)、下村満子(朝日新聞)の審査委員会で、以下の5人が選ばれ、彫刻家伊原通夫氏が無償でデザインされた作品が賞として授与されました。経歴と受賞理由は別項通りです。

陰山 淳

熊平 肇

小野 春生

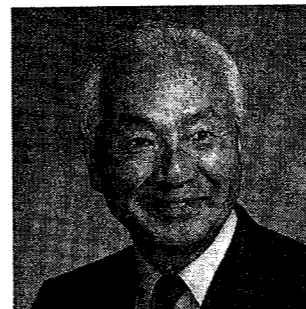
カサンドラ・A・パイル

フィリップ・(ユージン)・ウィリアムズ

なおフルブライト賞はさらに2回、1995年と1998年も授与されます。

1992 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST (28)

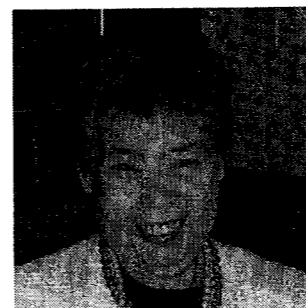
NAME	DISCIPLINE / TOPIC	GRANT
RESEARCHERS (7)		
Dr. BRENNANN, Maura J.	Medical Education / Internship & compassionate care	Toyota Motor
Dr. CHEN, Anne C.	Communications & Journalism / Mass communication	Mitsubishi group
Mr. FIRST, Harry	Law / Antitrust theory and goals in Japan and U.S.	Fuji Bank
Dr. KEARNEY, Reginald	History / Japanese scholarship regarding black Americans	YKK
Ms. MANIFOLD, Diane L.	Economics / Retail distribution system	Sumitomo group
Dr. NANTO, Dick K.	Economics / Business activity, technology & gov. policy	Industrial Bank of Japan
Dr. OKADA, Annabelle A.	Medicine / Medical education in Japan & U.S.	Japan Economic Foundation
STUDENTS - Ph.D. candidates & Professionals (10)		
Mr. GRIMES, William W.	Political Science / International economic coordination	Japan Economic Foundation
Ms. IPPOLITO, Jean M.	Art / Computer graphic art	Dainippon Ink & Chemicals
Mr. JOHNSON, David T.	Sociology / Socio-political foundations of punishment	Japan Economic Foundation
Mr. JOHNSON, Edward S.	Law / Corporate legal departments and employes	Mitsui group
Ms. KINNEY, Carol J.	Sociology / Social structures and educational value	Japan Economic Foundation
Ms. PERIMENIS, Louisa	Anthropology / Human behavior in organizations	IBM Japan
Mr. RUTCHIK, Gregory S.	Law / Body of law which monitors licencing agreements	Ajinomoto
Mr. SOUTHER, George S.	Law / Law and share-guilds in Tokugawa period	Nissan Motor
Mr. TACKNEY, Charles T.	Industrial Relations / Lifetime employment system	Takahashi Foundation
Ms. WALD, Julie A.	Civil Engineering / Diffusion of new technologies	Komatsu
STUDENTS - Recent B.A.s (8)		
Mr. CONROY, JR. Hugh C.	International Economics / Japan's "Globalization"	Hokuriku area
Ms. GAUNDER, Alisa L.	Political Science / Legislative systems	Tokyo area
Mr. HART, David J.	Molecular Biology / Gene regulation in neurons	Kyushu alumini
Mr. HUESTON, David O.	Economics / Structure of Japanese economics	Shino Fund
Ms. NAGAOKA, Jenny K.	International Education / Returning children	Tohoku Alumini
Mr. NEFF, Alexander M.	Political Science / Military contracting process	Hokkaido area
Mr. NOZAN, Jonathan M.	Religion / Social changes and new religious groups	Kyoto-Shiga area
Ms. STANTON, Heather L.	International Relations / Trade & investment	Okinawa area
JAPANESE STUDENTS (3)		
小林 宣子	English Literature / Comparative literature	YKK
柴田 明穂	Law / International law	Mobil
赤木 英子	Law / Copyright infringement	YKK



陰山 淳



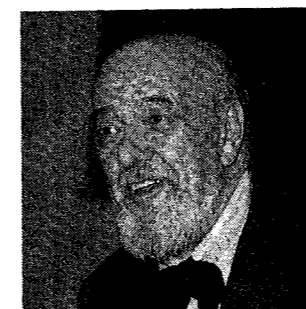
熊平 肇



小野 春生



カサンドラ A. パイル



フィリップ(ユージン)ウィリアムズ

KAGEYAMA Atsushi (John) - Visiting Scholar, College of Business Administration, U. of Oregon. B.A. (1949), M.A. (1953), Doshisha U.; MBA, U. of Oregon (1958). 1955 Fulbrighter to U. of Oregon. During his career at Matsushita Electric, Kageyama, as president of American Kotobuki Electronics, was actively involved in business and educational programs throughout the community including directorships of the Japan-American Society of Oregon, Linter Center for Advanced Education, Columbia Business Community for the Arts, Pacific University Foundation, and the World Affairs Council of Oregon. He has been recognized for his contributions by the city of Vancouver, the World Affairs Council of Oregon, and the Vancouver Rotary Club.

The judges selected Mr. Kageyama for the Fulbright Prize because he is representative of the Japanese businessman in the U.S. who promotes mutual understanding between Japan and the U.S. through active participation in his local community.

KUMAHIRA Hajime - President, Kumahira Seisaku-Jo, Hiroshima. B.A. Faculty of Law, U. of Tokyo (1950). Beginning with 10 scholarships in 1984, Kumahira, through the Kumahira Scholarship Association has been awarding grants of ¥50,000 to about 50 students from Asia each year who are studying in the Hiroshima area for a total of 401 till 1992. In addition, Kumahira sponsors a symposium each year where students can express their views on Japan's internationalization. Kumahira is a trustee of the Foundation of Social Education Association, the Hiroshima Family Court, executive director of the Japan Federation of Employers' Association, and chairman of the Japan Safe, Furniture Cooperative Union.

The judges selected Mr. Kumahira for the Fulbright Prize because he is representative of the businessman at the local level who practices the Fulbright spirit through his financial and other assistance to foreign students.

ONO Harumi - Retired Medical Doctor, Tokyo. College Physician, Shirayuri Women's U. and Minato-ku Mitate Day Nursery. M.D., Tokyo Women's Medical College, 1948. Was a 1950-51 GARIOA grantee to Bellevue University Hospital, N.Y. Until her retirement in 1989, she specialized in pediatrics at the Tokyo Metropolitan Police Hospital for 40 years. From the early days of the program, Ono assisted many American grantees regarding their health and medical concerns in an unofficial capacity and participated in the orientation programs for Japanese Fulbrighters about to embark for the U.S. She is a board member of the International Medical Society of Japan and former president (1974) of the Medical Women's International Association. She has engaged in numerous activities such as conducting inoculation clinics for children, editing medical journals, translating medical and other articles into Japanese and English, and teaching English to nurses and doctors.

The judges selected Dr. Ono for the Fulbright Prize because she epitomizes the "unsung heroine" who, through her professional and personal activities, has promoted mutual understanding at a very personal level.

Cassandra A. PYLE - Executive Director, Council for the International Exchange of Scholars (CIES), Washington, D.C., B.A. political science, U. of Colorado (1957). Pyle has been involved with the Fulbright program in many capacities beginning in 1958 at the Institute for International Education (IIE), at the University of Chicago where she worked on foreign admissions, study abroad, and foreign faculty (1961-1974), returning to IIE as Area Director for South America (1974-77), then as IIE Vice President for Fellowship Services (1977-1981). She has been Executive Director of the CIES since 1981. Pyle has served on numerous committees and boards in the international field including the Council on Foreign Relations, U.S. National Commission for UNESCO, president of the National Association for Foreign Student Affairs, and the Liaison Group for International Educational Exchange. She received double honors in 1991 from her alma mater which awarded her both the Board of Regents Distinguished Service Award and the alumni association's Distinguished Achievement Award.

The judges selected Ms. Pyle for the Fulbright Prize because as a "professional among professionals" she is respected and admired by grantees and colleagues throughout the world for the warmth and humanity she has brought to her official responsibilities.

Philip (Eugene) WILLIAMS - Professor, Nagoya Gakuin University. B.A., Eng. Lit., Franklin and Marshall College, M. of Div., Yale U.(1950), S.T.M., lit. and rel., Columbia U.-Union Theological Seminary (1956), Ph.D. U. of Pennsylvania (1964). Beginning with the Occupation, Williams has spent more than 40 years in Japan contributing in numerous capacities - as a university professor, church leader, writer, translator, and volunteer - to promoting better understanding between Japanese and Americans together with his co-worker, Mrs. Williams. His work has extended far beyond his home in Sendai and encompasses not only his own fields but also assistance to professors in medicine, engineering and metallurgy to translate their work for wider dispersion. He has served on the board of directors of Tohoku Gakuin U., as editor of Japan Christian Quarterly, and as vice-president of the English poetry society of Japan among others. He has authored 13 books in both languages and more than 50 articles in various journals.

The judges selected Prof. Williams for his long and varied contributions to promoting mutual understanding between Japan and the U.S. which has earned him wide admiration and respect from his Japanese colleagues and friends.

◎1億円の個人募金集める 平成4年度全国理事会

平成4年度全国理事会は9月18日、フルブライト計画40周年記念全国大会が開催されたパシフィコ横浜で開かれ、議案「第3回GF個人募金」に関して審議した結果、以下のように募金活動を行うことになりました。

募金の名称：第3回GF個人募金

募金の総額：1億円（対象同窓生約5,000人）

同窓生当たり：1口1万円、できれば2口以上

募金振込日：平成4年12月31日

具体的な募金方法などをご説明した趣意書は近く同窓会の皆さんに送られます。絶大なご協力をお願いいたします。お問い合わせは事務局まで。なお趣意書は別項で掲載しました。

第3回GF個人募金趣意書

時下益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

御高承の様に、フルブライト資金並びにその前身であるガリオア資金による教育交流計画は昭和二十四年以来、今日まで四十三年にわたり、人物交流を通じて日米間の相互理解を深める上で絶大な効果を挙げて参りました。

現在までに、この制度によって米国に留学した日本人は約六千三百名に対し、米国からの留学生は約千六百名に過ぎません。その費用は昭和五十三年度までは米国政府の全額負担、五十四年以降は日米両国政府の折半により賄われております。

日米間の経済、貿易摩擦が益々複雑な局面を迎えている現在、フルブライト制度のような人的交流を日本側の積極的な支援により一層拡大強化する必要性は日々高まりつつあります。このような状況の下で、昭和五十七年フルブライト交流計画三十周年を記念して、全国九地区にガリオア・フルブライト同窓会を結成、これが中心となって、日米留学生交換を強化増強するための募金運動を始めました。

この運動はその発足の趣旨に従い、特に米国人の日本留学の機会を増やす事を主眼としております。幸い同窓生および理解ある多くの企業、団体の多大の御協力により、現在まで約拾億円の寄付金が寄せられ、これによって既に百二十三名の米国人研究者を招待することが出来ました。また、一部の企業で、日本人の米国留学を条件にこの運動に参加された向きもあるので、他に十名の日本人留学生を送り出しました。更にこの運動の開始以前に同一趣旨の寄附を日米教育委員会に対して行ってお

れた企業の分が金額で約一億円、人数で二十五名ありますので人数の合計は百五十八名、金額は約拾億円となります。

募金に当たりご説明申し上げましたように、これらの寄付金は、日米教育委員会（フルブライト委員会）に寄託され、運営されて参りました。後述の財団発足までは、この運営の事務費は実質的に日米教育委員会が負担して下さいました。奨学生の選考は政府資金によるフルブライト奨学生と全く同じ基準と手続きで実施され、高い水準を維持すると共に、奨学生には奨学金の性格につき十分説明して趣旨が生かされて参りました。

世界各国をカバーするフルブライト交流計画の長い歴史の中で、フルブライト留学同窓生を中心とした募金活動が実施されているのは日本のみであり、米国政府関係者からも高く評価されておりますのは、誠に御同慶の至りであります。折角成功裡に発足、運営されて参りましたこの運動の効率化、恒久化を計る為に、その中核となるべき、財団法人日米教育交流振興財団（通称フルブライト記念財団、理事長小山八郎）が昭和六十一年三月に設立され、十月には寄付金が免税となる試験研究法人等の資格が外務、文部両省より認可されました。

今後この財団が設立の趣旨に沿って毎年最低二十五名程度の米国人学生、研究者を受入れて行く為には当局指導に従う為の基本財産の充実および最低限の事業費を含め、当分毎年約億五千万円の資金が必要であります。現在、財団および日米教育委員会は財団の基本財産五千万の他に約三年分の運用資産を保有しておりますが、今後この民間交流計画を一層充実継続するためには、われわれ同窓会としては継続的に募金活動を行ってゆく必要があります。

振り返ってみますと、此迄の募金運動の成功は矢張り同窓生を中心とする第一回個人募金の成功が起動力となっている事は明かであります。第二回の企業募金の取り進めに当ってはこの個人募金の成果が非常に高く評価され、その後の募金をスムーズにした事実があります。そこで平成四年度は、フルブライト計画四十周年に当たりますので、再び個人募金を先行させその成果を挺に企業・団体への協力依頼に展開して行きたいと考えます。

ついでには五年振りに同窓会の皆様を中心とした募金活動を大々的に行い、これにより、当面約一億円の資金を確保したいと存じますので先の募金計画に対し何卒本趣旨に御賛同下さいませようお願い申し上げます。

平成四年十月三十日

ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会
会長 渡邊 宏
日米教育交流振興財団
理事長 小山八郎

◎和気藹々日米親善ゴルフ大会

—1000万円の寄付は史上最高—

10月19日戸塚カントリークラブは雨だった。しかし参加者180名は殆ど全員定刻集合、何とか我慢できる程度の雨の中を和気藹々白球を追った。

椎名大会実行委員長のユーモアたっぷりの挨拶でプレー後のパーティは始った。バブル崩壊にもかかわらず、参加者は14%、賞品提供会社は20%それぞれ増え、極めて盛り上がった大会になった。内閣総理大臣杯を受けた西コースの1位西本泰治氏、米国大使権を受けた東コースの1位野村秀雄氏以下プレーヤーは全て豪華な賞品を受け取ったが、今年の庄巻はトヨタ自動車提供の小型乗用車で、これは賞品ではなくオークションに付された。結局150万円という市価を若干上回る価格で山口善久二氏が落札されたが、もちろんこれはフルブライト記念財団への大会よりの寄付の一部となる事を意識しての高価格落札であったと感謝したい。財団への寄付は約1000万円と親善ゴルフ大会の歴史での最高額となった。参加者ならびにご支援頂いた皆様には心より御礼申し上げます。（渡邊 宏記）

◎40周年祝うフルブライト音楽祭

超一流アーティスト12人が感動の名演

フルブライト計画40周年を記念する「フルブライト音楽祭」が10月13日東京・赤坂のサントリーホールで華やかに開かれました。大日本インキ化学工業株式会社とサントリー株式会社の協賛によるもので、かつてフルブライト奨学金の音楽部門の選考委員をされた故マルセル・グリリー氏に捧げる音楽祭でもあります。出演の音楽家はみなフルブライト奨学生としてアメリカで学ばれた日本の誇るアーティストばかりです。

チェロの世界的な奏者である堤剛さんがコーディネーターとなって、仲間に呼び掛けたところ、堤さんを含めて以下の12人の演奏家が馳せ参じてくださいました。堤剛（チェロ、1961年）、以下アルファベット順に弘中孝（ピアノ、63年）、今井信子（ビオラ、63年）、岩崎洸（チェロ、64年）、岩谷悠子（バイオリン、63年）、川畑真知子（ピアノ、64年）、霧生吉秀（ファゴット、66年）、二宮裕子（ピアノ、61年）、関晴子（ピアノ、60年）、田崎悦子（ピアノ、60年）、上田誠（コントラバス、64年）、矢島広子（バイオリン、65年）。

ハイドンのピアノ三重奏曲、ガーシュインの3つの前奏曲、シューベルトのピアノ五重奏曲などを満員の会場は心いくまで堪能しました。皇太子殿下、アマコスト駐

日アメリカ大使らも熱演に最後まで拍手を送っておられました。皆さんは「自分が今あるのは、あの時フルブライト奨学金を得て、アメリカに留学できたお蔭だ。是非参加させてほしい」と言ってくれたそうです。この日の収益はすべてフルブライト記念財団に寄付されました。

◎開放的だったアメリカはどこに？

—庭にも心の中にも壁を築く—

アメリカの風景で日本と決定的に違うのは、自然はもちろんだが、垣根のない家々も際立った相違である。だれもが広々とした芝生の庭はアメリカ人の開放性を象徴しているという印象を強く受けるはずである。私を含め、フルブライト計画でアメリカで学んだものはとくにそれに感銘を受けていると思う。

ところが最近アメリカ人が庭にも心の中にも壁を築き始めていると、イギリスのジャーナリストが書いている。

1980年代の終わりにアメリカで半分学生、半分ジャーナリストの生活をしてきたベン・マキンタイアがこのほどロンドン・タイムズの特派員として改めて訪米、大統領選挙取材した。その時の印象記が10月31日付の同紙の付録、サタデー・レビューにのっている。大変面白いので紹介したい。

かれはまず作家ジョン・アブダイクが最近書いたエッセイを引用している。アブダイクはこう言っている。「われわれの庭の垣根のない形に表現されたアメリカの開放性と寛容さは今や防衛的になり、保護主義的になり、排他的になろうとしている。垣根が築かれている。心の中にも、屋敷にも」。

マキンタイア記者によると、郊外の住宅地を歩いてみると、高い垣根や電線と隣の境界を仕切り、サーチライトをつけているところもあるという。

こうした風景のささやかな変化と見えるものも、アメリカの心理的な輪郭にもっと激しい変化が起きていることの反映である。その原因は強盗の侵入を恐れてのことであるが、それは悲しい、印象的な行為でもある。かつては世界で最も開放的であったアメリカ人は自らの心を垣根の中に閉じ込めているのだ。

自分の家の近くには、ごみ焼却炉などいやなものは置いて欲しくないといういわゆる Nimby (not in my backyard) 現象が強まっているのも、そうした風潮の一環であろう。

マンハッタンは大金持ちと極貧者しか住めなくなった。その他の多くの都市でも、中産階級は社会的な隔絶